

『アドヴァンス・サロン』一九八一年十月（ADE研究会）

## 《巻頭寸言》 私のアンテナ

リーダー<sup>注</sup>

八月二日奈良で行われた障がい者たちの「わたぼうし音楽祭」をNHKが放送した。十五才村山美和ちゃんが二階の自分の部屋まで這い上がる姿、歪んだ左右の指、言葉をしぼり出すときの必死の表情は美しかった。左手にペンを握って文字を描いていく、「生きているなら希望の花を」「今は両親がいるからいいけど」などという声が耳に残っている。

二十二才のボランテイア青年酒井君が美和ちゃんの家泊まり込んで、カレンダーという詩に作曲したというのも良かった。

テレビ朝日が流した「いま再び日帝の影を見る」の中で、三世朝鮮人の林賢一君の自殺をめぐっての悲しみと憎しみの表情の場面はやり切れなかった。林君にその苦しみを与えた少年たちはどういう人たちなのだろうか。人間て何なのだろうか。

新聞で一時やかましかった教科書問題で、帝国主義の言葉を使った教科書が検定にひっかったというが、そんな言葉の問題より、私たちの心の中の帝国主義をつぶしていくために、もつと事実を投げ出す教科書がほしい。美しいものも、醜いものも。

アメリカ軍がベトナムで行った枯葉作戦の薬物で多くの奇形児が生まれている状況の放送にはぞっとした。奇形児たちの無邪気さ。

東京都は、二十三区のし尿を海に投棄することにした。財政再建のためという。翌日の新聞には、東京湾にPCBが増えたとあった。

注…矢口新のペンネームの一つ